

**<オリエンテーション>****A. テーマ：キリスト教思想の基本文献を読む**

また、この講読は、キリスト教専修に所属の学部生の卒論演習を兼ねており、研究発表の機会を設けることが予定されている。

**B. テキスト**

ティリッヒ『生きる勇気』にはいくつかの邦訳が存在するが、どの訳を主に使用するかは、授業にて説明する。いずれの訳を使用するにしても、諸邦訳を相互に比較することを行いたい。

**C. 成績などについて**

- ・平常点による。(受講者には、数回の発表担当を課するが、その発表内容と、毎回の演習への参加度とから総合的に判断する。)
- ・使用するテキストについては、コピーを配布する。
- ・参考文献：授業中に紹介する。
- ・受講生には、キリスト教思想に対する関心と積極的な授業参加(参考文献による復習を含め)を期待したい。質問は、オフィスアワー(火3・木3)を利用するか、メール(アドレスは、授業にて指示)で行うことができる。

**D. 授業(予習+出席・発表+復習)の進め方****1. 演習参加者の役割**

- (1)授業前：読み・訳す・分析する → 問題点・補足事項。
- (2)授業での発表：順番に読み・訳す。質疑。討論。
- (3)授業後：残った問題を検討する。

受講者は、それぞれの担当箇所について、テキストを精読し、その要点・概要をまとめ、関連事項について調査、討論すべき問題点の明確化を行った上で(これらを記載したレジュメを作成すること)、演習に出席することが望まれる。また、自分の担当箇所以外についても予習を十分に行い、討論に積極的に参加することが必要である。

二回目以降は、ティリッヒ『生きる勇気』の内、第一章「存在と勇気」から、担当者の解説を通して、順番に精読してゆく。

**<導入>ティリッヒ入門1****(1) ティリッヒ思想とその射程****1. ティリッヒ(1886-1965)**

- ・神学と哲学の境界(神学者・哲学者)、宗教社会主義、文化の神学、宗教史の神学
- ・ドイツからアメリカへ → 現代キリスト教思想は理論と実践の両面で変革を必要としている。

ティリッヒ(Paul Tillich, 1886-1965)：ドイツ生まれのプロテスタント神学者、宗教哲学者。ベルリン、テュービンゲン、フランクフルトなどの諸大学で教え、宗教社会主義の理論家として活躍。33年にヒットラー政権によって教授職から追放され、アメリカ亡命後はユニオン神学校、ハーヴァード、シカゴの諸大学で活躍。アメリカの神学と宗教哲学に大きな影響を与えた。ティリッヒ思想の特徴は、自伝「境界において」の表題にあるように、宗教と文化、神学と哲学、観念論とマルクス主義など、緊張関係にある二つの領域の境界

で思索を展開している点に認められる。アメリカ時代の代表作『組織神学』（全三巻 新教出版社）では、人間存在の中に構造的に組み込まれた諸問題が宗教的問いとして哲学的に取り出され（哲学的神学）、その問いに対してキリスト教のメッセージがいかに答えるかが体系的に示された。この組織神学の方法論が「相関の方法」である。ティリッヒの影響は神学や宗教哲学を超えて宗教学全般に及んでおり、究極的関心という信仰概念や、信仰の具体的表現形態を扱うシンボル論はとくに重要である。晩年は、日本の宗教者との交流などを通じて宗教史の神学を構想するに至るが、未完に終わった。（『岩波キリスト教辞典』）

**（２）ティリッヒ神学の方法と体系**

6. ティリッヒ組織神学構想：

「相関の方法」(Method of Correlation)によって構成される体系の横軸（横構造）  
 + 三位一体論的あるいは救済論的な体系の縦軸（縦構造）

7. 神学の解釈学的構造と循環

1) 「相関の構造」：「問いと答え」の相関＝解釈学的構造

- ・ 問いの定式化（哲学） ← 状況
- ・ メッセージの答えとしての提示・解釈（神学）

2) 「個と共同体」の循環：共同体における問答・討論・対話の個人による集約

8. 「問いと答え」の定式化における哲学（あるいは哲学的要素）の役割

問いと答えは自律性を保ちつつも、相互に依存し合っている。

↓

「諸科学、哲学、神学（答えとしてのメッセージの解釈）」の三者関係。

づけが問題となるということである。

9. 「すべての神学的労作の一つの極である『状況』とは、個人や集団がその中において生きる場所の経験的な心理学的社会的状況を意味しない。その状況とは、彼らが彼らの実存の自己理解をその中で表現する場所の科学的、芸術的、経済的、政治的、倫理的諸形態の総体を意味する」、「神学が考えなければならない『状況』とはそれぞれの時代にさまざまな心理学的社会的諸条件下においてなされる創造的な実存の自己理解である。」(4)

10. 解釈学的中心（意味付与原理）としての規範：多様な素材を一つの意味連関へとまとめあげ、神学に組織あるいは体系という統合的な形態を与える。神学者の共同体性。

	Question	Answer
Vol.1 Introduction		
Part I	Reason	Revelation
Part II	Being	God
Vol.2 Part III	Existence	Christ
Vol.3 Part IV	Life	Spirit
Part V	History	Kingdom of God

## <導入2> ティリッヒ『生きる勇気』

11-12 頁

- ・ 人間状況を理解するための鍵概念としての「勇気」  
神学的、社会学的、哲学的
- ・ 倫理的／人間実存の全領域
  
- ・ プラトンの対話篇『ラケス』：「ごく初期のもの」  
「勇気」の定義の試みとその論駁：  
将軍ニキアス：「何を恐れ、何を敢えてなすべきか」を知る知識  
知識＝普遍的問題に関わる  
徳の一つの部分
- ・ ソクラテスにおける「勇気」定義の断念：  
「勇気の本質について知らない」  
→徳は知である→本質との合致において行為することの不可能  
↓  
「勇気を他のいろいろな徳の中の一つの徳として定義できない」＝人間実存の根本問題  
↓
- ・ 勇気とは何かの倫理的問いは、存在論的問いを要求する。  
↓  
勇気から存在へ：「第一章」

199E：ソクラテスの言葉

- 「・・・徳の一部ではなくて、徳の全体であるということになるでしょう。」
- 「ところがじつは、われわれは、〈勇気〉を、徳の諸部分の一つである、と主張していたのです。」
- 「ところが、いま言われたものは、そうではないようです。」
- 「そうしますと、ニキアス、われわれは、〈勇気〉が何であるか、ということを見つげなかったのです。」

Q：

- ・ 「倫理学と存在論」、「倫理学と認識論」  
徳 知
- ・ 「状況」
- ・ キルケゴールのソクラテス論（『死に至る病』）  
「罪は無知である。これが周知のようにソクラテス的な定義である。」（142）  
認識と意志の関係の問題
- ・ ギリシャ哲学には固有の意味での意志論は存在しない（ハンナ・アーレント）。